

○按ズルニ、此ヨリ以後、此劍ノ事所見ナシ。

践祚獻新帝

〔兵範記〕仁安三年二月十九日壬子、晝御座御劍先例執柄令獻給、圖脫之時、又返給執柄、蓋先例也、仍舊主條六件御劍返給殿下、基房原今夕自殿下被獻當今倉高也、

〔践祚部類抄安德〕首書晝御座御劍別口代御物已下被渡之、

〔經俊卿記〕寛元四年正月廿九日、今日御讓位也、略中次予自院嵯峨相具晝御座御劍參殿下實藤原經親予忠親供御草鞋、左少將通家朝臣取晝御座御劍前行、略中著神宴御座通家朝臣授御

御直廬奉返之、即以予被進新帝、深草後予置晝御座、
〔山槐記〕永曆元年十二月廿七日辛未、今夜内侍所御神樂也、自大炊御門殿入御溫明殿之後申事由亥刻出御、予忠親藤原供御草鞋、左少將通家朝臣取晝御座御劍前行、略中著神宴御座通家朝臣授御劍於内侍令置御座邊、

〔徒然草下〕或ところの侍とも内侍所の御神樂を見て、人にはかたるにて、寶劍をば其人ぞもち給へるなをいふをきいて、うちなる女房のなかに別殿の行幸は、晝の御座の御劍にてこそあれど、しおびやかにいひたりし、心にくかりき、その人ふるき典侍なりけるとかや、

雜載

〔園太曆〕觀應二年十二月廿二日、今日遣消息於具忠朝臣仙洞御返事之趣也、略中其間事續左、略中

一、晝御座御劍事、近來無被定置御劍歟、元弘正慶以後、只以便宜細々御劍被通用了、

〔百練抄六崇德〕大治四年五月五日、午刻法皇河白被鑄御護劍五、午日午刻支干相生之故也、

○按ズルニ、御護劍ト云ヘルモ、晝御座御劍ノ類ナルベシ、姑ク此ニ附記ス、

〔世俗淺深秘抄上〕惣御劍置様事

惣置劍様、上下皆同、次將置御劍於大床子様、若ハ御座爾置次第皆同様也、不知此首尾稱先例由令失也、南面西面爾御座時置左方、南面ナラ乃東外方柄南也、西面之時可知是置樣、東面北面御座時置右方、東面ナラ乃南外方柄西也、北面以是可知、是秘藏事也、先賢作法甚違此說、然而以此說可爲